様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３０９１

研究課題名（和文）清代乾隆時代史の再構成―「清朝政治の長い18世紀」構想を射程として―

研究課題名（英文）A Study on the Qing Dynasty's Politics in the Long Eighteenth Century

研究代表者
黨　武彦（To, Takehiko）

熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授

研究者番号：８０２５１３８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：清代乾隆期（1736-1795）の政治史の成果を「清朝政治史の長い18世紀」（1680年前後～1850前後）研究の中核とすることを構想した。新しい史料群として詩集に着目した。档案史料と詩を史料の両輪としていくことにより、従来の研究に比してより立体的に政治史を再構成することを目途とした
具体的には、乾隆初～中期の行政官である方観承の詩集を分析し、結果として、乾隆帝とのパーソナルな関係、官僚・幕僚間の交流関係など、政治史において重要な人間関係の詳細が判明し、ジューンガル遠征などの対外関係、貧民救済などの社会の変動に関わる行政の動きなども明らかにし、当時の政治史を重層的にとらえることを可能にした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
現在、世界においてその存在感を増す中国は、伝統的にその正統性の主張の根本に歴史を置き、それを政治的な重要課題とする。例えば中国が主張する領土は、18世紀の清朝乾隆期(1736-1795)の最大支配領域をベースにしている。18世紀の中国は、その経済的な繁栄のもと、同時期に産業革命を経る欧州とは別の形で貧困救済などの社会の諸問題に対峙していた。本研究は、特に皇帝や官僚の動きを実証的に明らかにして、この時期の政治過程を歴史的に明らかにした。このようなアプローチと成果は、これから我々が中国という存在とどのように向き合っていくかを考えるうえで非常に重要である。

研究成果の概要（英文）：This study is a historical study of the Qing dynasty's politics in the long eighteenth century. I focused on the collection of poems as a new historical material. Specifically, we analyzed a collection of poems by a scholar official, Fang Guancheng (1698-1768). As a result, we revealed his personal relationship with the Qianlong emperor, details of his human relations of another officers,and trends of domestic politics and international relations.

研究分野：東洋史学

キーワード：長い18世紀　乾隆帝　方観承　清朝　档案　詩　礼の聖職者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

現在、中国はグローバル化に対応しつつ独自性を主張し、歴史の再評価がその主張を支えている。その一環である「清史工程」という国家主導の清史編纂プロジェクトはすでに完成しつつあるが、そこでは政治史が重要な部分を占めており、日本の中国研究者という視点からその成果を相対化する必要がある。ただし、日本における清代政治史の研究成果は全体的に乏しく、特に現政権がその支配領域の正統性の根拠とする乾隆期（1736-1795）の研究には空白の部分が多かった。

清代政治史の流れについては、概説書において従来も記述されてきた。乾隆期に先立つ雍正期については、1950～60 年代の京都大学の雍正時代研究の成果、また、岸本美緒（『明清と李朝の時代』講談社、1998）による明末以降の社会の流動化に対応せんとする雍正帝の政治思想研究の成果を踏まえた上で、詳細な記述がされているが、乾隆期についてはその軍事的成果と支配領域の拡大、康熙の寛大と雍正の厳格の折衷、南巡・外征による浪費、『四庫全書』編纂と思想統制、乾隆末年における白蓮教徒の叛乱等に見られる衰退への徴候、が羅列的に語られるに過ぎない。

清代政治史に関する専論については、大谷敏夫『清代の政治と文化』（朋友書店、2002）が貴重な成果であるが、主題は政治思想の分析であり、具体的政治過程の分析ではない。一方、石橋崇雄（『大清帝国』講談社、2000）、や岡田英弘（『モンゴル帝国から大清帝国へ』藤原書店、2010）などにより、清朝を単に中国王朝として位置づけるのではなく、その東アジア世界全体への影響を大きな枠組みでとらえ直す研究の進展があり、これらの成果は批判的継承をすべきである。批判的継承とは、その見解の妥当性を十分に認めたうえで、やはり大きなウエイトを占めていた中国本土支配・漢族支配について改めて重点的に研究をする必要がある、ということである。

国外においては、中国人民大学の 18 世紀研究（郭成康『18 世紀的中国与世界』政治巻、遼海出版社、1999）において、政治史が正面から扱われているが、政治制度の記述に重点がおかれている。アメリカではフィリップ・クーンが『中国近世の霊魂泥棒』（谷井俊仁等訳、平凡社、1996）において、割辮案を通じて乾隆期の政治状況を描いており、谷井の解説も含め多くの示唆に富むものである。本研究は以上の内外の研究状況の中で、乾隆期の政治史を再構成しようとするものである。

報告者は、著書『清代経済政策史の研究』（汲古書院、2011）の中で、乾隆期の経済政策の分析を行った。その分析を通じて明らかになったのは、個々の政策が必ずしも合目的的に実施されるわけでなく、皇帝と官僚の、あるいは官僚間の人格的関係のなかで形成されていくことであった。しかし、档案史料や政書などの行政史料の表面の記述だけを解釈するだけでは見えてこない部分が多く、この課題をいかに解決するかを考慮するうちに着想したのが、人物に焦点をあて、档案以外の史料に着目することであり、より具体的には詩集を史料とすることであった。

この着想により、平成 20 年度以降、乾隆時代に直隷總督をつとめた方觀承という官僚の詩集である『述本堂詩集』に詠まれたおよそ 160 首の詩・およびその割註を、档案史料・実録・『御製詩文集』、地方志や筆記資料類と照合し、その詩の内容や詠まれた背景を考察し、乾隆帝や他の官僚との繋がり、具体的政策との連関などを明らかにする作業を行い、詩を史料とすることの有効性を試す論考を発表し、ある程度の見通しをつけることができた。

その際に恣意的な解釈におちいらないようにするために、何らかの社会科学的な方法を用いる必要を思い、着想したのが政治学モデルの活用であった。

２．研究の目的

「清朝政治の長い 18 世紀」構想の展開を大きな研究の目的とした。「清朝政治の長い 18 世紀」とは、康熙帝による奏摺政治の採用（およそ 1680 年前後）から、中国がグローバル化の波に巻き込まれる道光帝までの時期（およそ 1850 年前後）を示す。この時期は清朝の皇帝独裁システムが非常に効果的に機能した時期である。一方でこのシステムには人格的な要素が作用する面もあるため、皇帝の個性を強調したによる断代的な分析も同時に必要である。長期的・短期的な視点を複合することにより、より構造的な政治史像を浮かび上がらせることができる。

歴史学は個別の事例を明らかにすることに主眼が置かれるため、政治史的解釈や評価に客観性の欠如がまま見られる。そこで政治学の理論を用い、解釈のモデル化をする必要があると考える。例えば、「清朝の経済政策は逆に、流動化の趨勢に対応した効率的な経済制度を構築するところにその主眼があった」（岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』）という表現は、歴史学の評価記述において一般的なものであるが、政治学の理論から言えば、「合理的行為者モデル」の典型であり、「清朝」を単一の合理的な行為体とみて、その意志決定を説明しようとするものである。しかし現実の政治は、官庁の利害、皇帝や官僚の利害によって左右され、規定されることが多い。これは組織過程モデル、官僚政治モデルによって解釈しうる。本研究では主としてこの二つのモデルを解釈に適用していく。政治学の理論によって歴史解釈の恣意化を抑制することにより、乾隆期政治史の実相を従来よりも的確にとらえることができると考えた。

史料面の特色を以下に述べる。清代政治史研究の基本的な史料は、「档案史料」と呼ばれる行政文書であり、申請者が主要な史料としてきたものである。政治過程において作成され蓄積されていくこの档案史料は、政治史研究に不可欠である。ただ、档案史料偏重の傾向は、視点を固定させてしまう危惧がある。そこで、新しい史料として特に「詩」に着目する。清朝の漢人科挙官僚は、詩人としての側面を有し、上奏文などの档案史料に見せない本音の部分を詩に残している、とされる。また、乾隆帝は全部で 4 万首以上といわれる詩を作り、その詩の内容は政治史の格好の材料となる。しかし、詩を叙述の一部に用いることはあっても全面的に活用した研究はない。档案史料と詩を史料の両輪としていくことで、従来の研究に比してより立体的に政治史を再構成することができるであろう。

従来研究が乏しかった乾隆期の政治過程の全体像が明確になるという結果により、「長い 18 世紀の中国政治史」の中核である時期の分析が進み、清代史のより多面的な歴史解釈が可能になる。さらに、同時代の日本、イスラーム圏、ヨーロッパなどの政治史を参照し比較研究をおこなうことにより、清代史という枠を乗り越え、中国史全体において、秦漢帝国以来の帝政という政体の完成体の様相を体系的に描き、帝政史全体の中に位置づける作業として重要な研究になると予想した。

３．研究の方法

まず、乾隆前期の政治過程の分析を行うが、乾隆期は60年の長期にわたるため、以下のような時期区分を行った。

第１期　乾隆元年～乾隆 10 年　　張廷玉・鄂爾泰の輔政時期

第２期　乾隆 11 年～乾隆 19 年　乾隆帝の実質的親政開始～南巡開始～孫嘉淦偽稿事件

第３期　乾隆 20 年～乾隆 40 年　胡中藻案、文字の獄の開始、股肱の臣下の相次ぐ死去

第４期　乾隆 41 年～乾隆 60 年　四庫全書編纂、和珅の実権掌握

まず、乾隆20年前後に至るまでの第１期、第２期に焦点をあてて研究を進行させた。特に乾隆

10年前後までの時期は、言路が比較的開かれ、多くはアダムスミスのpolitical economy に比定しうる「経世済民」の諸問題に対応せんとする様々な政策が多くの官僚から提議される時期である。

この時期の政治過程に大きく関わる官僚のうち、具体的には鄂爾泰・張廷玉・尹繼善・高斌・方観承・梁詩正・汪由敦・陳弘謀・劉統勲・傅恒という現在申請者が重要だと考えている10名を選択したうえで、その①履歴、②業績・事績、③乾隆帝との関係、④官僚間の関係、を軸に整理検討していく。史料は档案史料を軸に、伝記史料・筆記史料の各人への言及を網羅的に収集して分析を進めていく。この手法はすでに申請者が発表した「方観承とその時代」(『東洋文化研究』7、2005）という研究論文において用いた手法であり、その有効性は実証済みである。

上記の作業と同時に、従来史料としての活用が遅れている「詩」を利用して政治過程研究を進めていく。具体的には、すでに着手していた乾隆初～中期に直隷総督を20年近く務めた方観承の『述本堂詩集』を読み進める作業を継続し、その訳注を完成させる。

その作業で明らかにしうるのは、特に上記の③乾隆帝との関係、および④官僚間関係であり、これは、政治史において重要な人間関係の詳細である。

次の研究の手順としては、詩を史料として用いた分析対象を、上記 10 名の官僚を対象に広げていく。さしあたり梁詩正の『矢音集』、尹繼善の『尹文端公詩集』、汪由敦の『松泉詩文集』の読解と訳注を作る作業を行う。特に満洲人の有力政治家であり、長年各地の総督を務めた尹繼善の詩集の分析からは期待できる成果は大きいと予想される。作業にあたっては詩の序文や割註の部分に政治史に必要な諸情報が記されているので、その部分に特に注意する。また、彼らのような高官は乾隆帝とのつながりが強いため、乾隆帝の御製詩文集とも照合し、具体的政策との関わりなどを分析していく。また、幕友（尹のケースであれば張鳳孫）の詩文集も分析の対象とし、より多面的なアプローチを行った。

研究成果の発表と平行して行うのが関係基礎資料の収集及びデータベース化である。特にこれまで史料の対象とならず、検討が遅れている詩集に重点をおきたい。ただ、本研究は、政治史研究がその主要目的であるから、当然のことながらすべての詩集が収集の対象になるわけではなく、政治家（行政官）および皇帝の詩集が対象になる。まず、清朝を通じての官僚と詩集の対応関係を調査してリストを作成し、その上で収集作業に入る。リストの対象は、袁枚のような文人としては有名であるが、行政官としては知県にとどまるものも含め網羅的に行いたいが、本研究の収集の基準は文学的価値ではなく、あくまでも政治史の史料として資するかどうかであるので、実際の収集は、中央では九卿クラス、地方では総督・巡撫クラスの政策課題（アジェンダ）の提起が自ら可能な行政官、また、官僚制の位階では下位ではあるが、政策批判・提案の役割を持つ科道官（六科給事中・十五道監察御史）、南書房など官に任ぜられて皇帝に近い位置にあり、その政治的影響力が大きい翰林官のものを対象とする。具体的官僚としては、（１）において挙げた10名の他に、陳儀・史貽直・孫嘉淦・荘有恭・蔣炳・紀昀・王鳴盛・蔣士銓等々、多くを挙げることができる。

乾隆前期の研究を進展させつつ、さらに乾隆帝の政治の迷走が始まる第３期である乾隆 20 年～40 年の政治過程分析に着手し、例えば和珅実権掌握の背景等を再検討する。さらに乾隆期に続く時代である嘉慶期（1796-1820）研究をも視野に収めつつ、第４期の乾隆後期研究に重点を完全に移行させ、対象とする官僚を、阮元、王念孫、劉墉などに広げていく。

最終的には、「清朝政治史の長い 18 世紀」構想の総括的な考察を行い、乾隆期の成果を中心とした全体像を提示する成果を示すこととした。

４．研究成果

研究期間中は一貫して、従来史料としての活用が遅れている「詩」を利用して政治過程研究を進めていき、具体的には、乾隆初～中期に直隷総督を20年近く務めた方観承の『述本堂詩集』を読み進める作業を継続し、４編の研究論文を発表した。この作業で分析したのは、特に、乾隆帝とのパーソナルな関係、および官僚間の交流関係であり、これにより、政治史において重要な人間関係の詳細が判明し、また、直隷省の地域行政の重点課題、ジューンガル遠征などの対外関係に関わる大きな政治の情勢、貧民救済などの社会の変動に関わる行政の動きなども同時に明らかにした。また、翰林官を「禮の聖職者」とする新しい観点も提示し、当時の政治史を重層的にとらえることを可能にした。また、翰林官を「禮の聖職者」とする新しい観点も提示し、当時の政治史を重層的にとらえることを可能にした。現状では方観承という1人の官僚に分析を集中しているので、次第にその範囲を拡げていくことが課題となる。さしあたり方観承の幕友（張鳳孫）や同時代の督撫（例えば尹繼善）などがその対象となる。

研究成果として特筆すべきは、カリフォルニア大出版社から出版された *Public Goods Provision in the Early Modern Economy* という査読がある論文集に Infrastructure Maintenance in the Jifu Region, Beijing Metropolitan Region during the Eighteenth Century という論文を発表し、18世紀中国の公共事業と社会資本の直隷省地域経済との関わりについての論点を示すことができたことである。

海外資料調査（上海図書館）の成果として、新史料（方觀承等撰『春行疊韻詩』）を発見した。これは従来知られていなかった史料であると推定される。この史料の分析は、方觀承と彼の幕友との関係性をより詳細に明らかにすることを可能にし、研究の進捗に大いに寄与した。

国内資料調査（東京大学総合図書館）の成果として、新史料（方觀承撰『養局案記』）を発見した。これは従来知られていなかった史料であると推定される。この史料の分析は、方觀承の地域社会における貧民救済事業の詳細を明らかにすることを可能にし、研究の進捗に大いに寄与した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　6件）

１．著者名 黨武彦	４．巻 67
２．論文標題 方觀承撰『燕香二集』下について（上）	５．発行年 2018年
３．雑誌名 熊本大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 39-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Takehiko To	４．巻 0
２．論文標題 Infrastructure Maintenance in the Jifu Region, Beijing Metropolitan Region during the Eighteenth Century	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Public Goods Provision in the Early Modern Economy	６．最初と最後の頁 202-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 黨武彦	４．巻 36
２．論文標題 中学校歴史教育における世界史的視点からの授業開発	５．発行年 2019年
３．雑誌名 熊本大学実践教育研究	６．最初と最後の頁 173-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 黨武彦	４．巻 66
２．論文標題 方觀承撰『燕香二集』上について（下）	５．発行年 2017年
３．雑誌名 熊本大学教育学部紀要	６．最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 黨武彦・藤瀬泰司・春田直紀・定松良彰	4．巻 66
2．論文標題 過去と現在の事象比較を取り入れた小学校歴史授業の開発―過去の社会の理解を通した現代社会の理解をめざして―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 熊本大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 41-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 黨武彦	4．巻 65
2．論文標題 方觀承撰『燕香二集』上について（上）	5．発行年 2016年
3．雑誌名 熊本大学教育学部紀要	6．最初と最後の頁 33-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考